

松浦嘉一

木曜会の思い出

木曜会の思い出

きゆうろう

旧臘十日午前零時半ごろ、先生御永眠の電報に、南町へ馳付けて、「名園別有天地」と石摺りにした屏風の蔭の、壮厳なお姿の先生の御骸の前に跪いた時の、あの瞬間の、なんとも言い知れぬ感動を甦えらせながら、ここに謹んで先生の御追憶を致します。

私は森田さんの「反響」初号を読んで、初めて、漱石山房木曜会という集りを知った。そのころは私が上京したてで、折があったら先生にお目見得したいと思ってい

た折柄とて、木曜会の集りをはるかに思いやっていた。すると、偶然、美添絃二さんが私を先生に紹介してもいいと言って下さった。そのかたが私の短い原稿を読んで、それを持って先生にお逢いしては、とのことであつた。私は天にも昇る心地して喜んだ。しかし、その原稿を持って行くということだけには、ちよつと、尻込みした。けれども、一日も早く先生にお逢いしたさに、つい、大胆無遠慮になつた私は、お恥しいものを持って先生をお訪ねすることに決心した。

大正三年四月、ちようど先生は「心」の執筆中であつ

た。私は木曜日ならいつ行ってもいいと聞いていたので、朝の十一時ごろに、学校の休み時間を利用して、先生の
お宅へ向った。

取次ぎの女中に紹介状を持って伺った旨を通ずると、女中は妙に顔を蹙^{しか}めて、初めてのおかたでいらっしやいますかと、尋ねた、私は、その時、紹介状を持ってくる男なんかにお逢いなさらない、先生の御機嫌の悪い日に来合せたのではないかなぞと、得手勝手な想像をした。が、紹介状を持って奥へ入った女中は、まもなく、再び玄関に現われた。

「ただいま御用をしていらっしやいまして、もう三十分間ほどで済みますから、も一度お出直し下さいますか、それとも、ちよつとの間、御散歩でもなさって、またお出で下さいまして、どちらでも宜しゅうございます」

私は、すぐ、先生の御執筆中をお妨げした、このうえもない不調法に気が付いて、きょうく恐懼措くところを知らなかつた。済まないことをしたと、自分を責めながら、私は、南町付近を歩きながら、三十分の経過を待った。もう三十分後には、いよいよ、先生にお目見得できるのだと思うと、動悸が打って止めることもできなかつた。

私は先生の平常に関しては、高等学校時代に、中川芳太郎さんからおりおり伺っていた。そして先生が近寄りたがたい、気むずかしい人に思われていた。だから、先生の作品を読んで、先生を慕わしい、懐しい、そしてお逢いしたくなるかたと思っても、いざとなると、逡巡するような心持が起ったりした。それゆえに、三十分後に先生にお逢いできるといふ確かな事実が、ちよつと、恐いような心持がせられた。

けれど、お目見得は造作なくすんだ。先生は、支那の画堂のようなあの応接間で私と相對して、私の二十枚ほ

どの原稿を御覧になった。幼稚なものを臆面もなく先生に見せた私の迂濶さを、今思えば、穴へでも入りたい心地がするが、当時の私はもつともらしく先生の前に坐つて、原稿をお読みになるのを黙って眺めていた。

先生は半ばまで御覧になったかと思うと、ふと、原稿を下に置かれた。そしてじつと、灑掃しやそうの行届いた、そして春日で暖かそうな庭面を御覧になった。硝子戸が開かれていて、階下の碧苔の上に、一面に、木賊が生えている。そして格好のいい芭蕉の傍に、なんであつたか、赤い色をした春の花が咲いていた。

先生は、ふと、こんなようなことを仰言った。

「そこいらに咲いている花は、根があつて、幹が出ていて、その枝に咲いているのでしよう。あの花だけ書いたつて駄目です。根をしつかり捉えなければ駄目です。花だけ書こうとするなら、ずっと飛び離れた、それこそ、ひょうびょう縹渺とした天界に人をおびき出すようなものでなければなりません。フェアリー・クウインのようなあの程度に行けば根なぞなくてよろしい」

先生のこの語がいかにも美しく私に響いた。そして、いよいよ先生が好きになった。

この日から私は、木曜日を待遠しく思つて、しげしげと南町へ通いだしたのである。名前のうえで、以前からよく知り抜いている先輩諸氏の間に通つて、先生初めそれらの人々から、いろいろの話を聞くのが、このうえもなく楽しかった。それで、いつも見えるかたがたと顔馴染になるまでは、時として、息が詰るような氣拙い思いをしたこともあつたが、そんな些事には、すぐ打勝つて、私はとうとう木曜会の常連の一人となつてしまつた。世間もなにも知らない、無経験な、そして臆病な私には、先生の前で、それこそ自由に、それこそ我儘に夜を更か

す先輩諸氏の口から洩れる話の、ほとんどすべてが、ストレンジの感がした。私はウィットの博物館にでも入ったような気持になって、熱心にいろいろの話に耳を傾けた。才思横溢の先輩諸氏は、ある時は先生に論鋒を差向け、ある時は互に、皮肉警拔、滑稽、諧謔の連発に鎬を削った。すべての調子が木曜会はウィットをお稽古をする夜祭のようであった。事実、あれほど知的な、天才的な多くの若い人々が、あれほど面白く集った会は、広い東京に二つとなかったであろう。

今年の、確か九月のある木曜日であった。その夜の面

白かった有様が今でも思い浮ばれる。

その夜、高い所から落ちる夢を見るのは、人間が猿であつた時、よく木から落ちた時の感覚が残っているからだそうだと、いう話が出た。すると内田君が、

「すると、このごろ僕は小鳥に惚れた夢を見たが、僕は昔は水鳥だったかな」とか「昨夜、小さな鬼が幾つも腹の上で躍っている夢に悩まされた」とか真顔で言つて笑わかしたりした。

狂人の話が出ると芥川君がこんなことを言つた。

「ある狂人は、他に別に変つたところはないが、ただ、

時々周囲が騒々しい騒々しいと口癖に言んです。座敷に閉じ込められていて、時々、騒々しいから畳を拭いてくれと言うそうです」

獣に追い掛けられる話が出ると先生が、

「僕は馬に追われたことがあったが恐いもんだね、しかし馬が目懸けて走っていたものは僕か、僕でないか分らないんだ」

芥川君が一宮で、門内へ犬入るべからず、入る犬は樸殺すべしという張札を見たと話すと、先生が、

「僕はロンドンにいた時、あるお寺の庭へ入ると、パー

ランブユレーターは入るべからずと、書いてあるんだ。パーランブユレーターは羅典語で散歩する人ということだね。僕はお参りする気はなし、散歩するつもりで来たのだから、戻って帰って、下宿のお神さんに、なぜ散歩する人は入っていないかと、訊いた。そして大いに笑われたね。下宿のお神さんからパーランブユレーターとは乳母車のことだと教えられた」

芥川君が、かつてに息を止めたり、かつてに息を戻す、仙人見たいな男を知っていると話した。すると先生が、「ウイルの力で息を止めたんだらう。そし今度はウイル

の力で息を戻すんだらう。この時のウイルスはどこから来たらう」

「意識は続いているでしょう」

「それなら苦しいね」

こんな夜を思出すにつけ、先生ぐらいいいかたには、天命は、なぜ、もっともっと長寿を許さなかつたらう。

先生ぐらいいいかたには死の最後というものが全然なくてもいい。しかも臨終の際には先生の肉体を人並み以上に苦めた運命の没常識さがしみじみかこたれる。また、幾人かの、まだいたいけないお子さんがたの前途を見な

い中に他界しなければならぬ、儘ならぬ浮世に、ただ、涙が滲り出るばかりである。とにかく、もう、すばぬけたる作家であつた先生は別な世界に入つてしまわれた。私等は、その世界に向つて、先生の跡を追馳けることもできない。ただただどんどん別な世界へお進みになる先生の後ろから、先生、待つて下さい、淋しいからもつとここにいてくださいと、無我夢中に叫ぶのみであつた。実に、先生は強い強い愛を私等に抱かせる人であつた。同時に、強い強い愛を私等に投げ掛ける人であつた。

私は、先生の死に会つてから、隙さえあれば、ただひ

とり書齋に閉籠って、先生の追想に耽けるのがなにより
の慰みであつた。こうした最初の夜、私は、私が氣の向
いた時しかつけない日記を取出して頁を繰って見た。大
正三年十一月十二日のところに、初めて木曜会の折の先
生のお詞が書留めてある。偶然にも、それは先生の死生
観であつた。

こんなことが書いてある――

先生はこのごろ早く死にたいというようなことを言わ
れる。今夜先生は戯談じょうだんのように、また真面目のように
こう仰言つた。

「死が僕の勝利だ、僕が死んだら葬式なんか、どうでもいいよ。ただみんなから万歳を称えてもらいたいね。なるとなれば、死は僕にとりていちばん目出度い。生の時に起った。あらゆる幸福な事件よりも目出度いから」

先生がいつごろから生における精神上と肉体上の苦痛に堪えられなくなったかは知らないが、この生の実際問題から起るいろいろの煩わしさと苦しさとに、あきあきしていられることは事実である。先生は立派な厭世家である。それに、先生の常病は肉体上、非常な苦痛である。そうなの。ただ、その肉体上の苦痛を逃れるために、死ん

でもよいくらいに思ったこともあると言われた。

「が、自殺するほどの大胆さはないね。またみずから手を下して死ぬということは拙いから」

またこんなことも仰言った。

「このライフ、人々が云々する理想とか、リズムとか、哲学とかいうものは、死に比べたら、吹けば飛ぶようなものだね。けれど死は絶対です。死ほど人間の掴み得るものの中で確かなものはない」

この先生の詞は、瞬間ではあったが、若い私等に重々しい沈黙を起さしめた。

私は、こうして、私の日記中、木曜会に関する文字だけを拾い読みしたが、その量があまりに少なかった。小宮さんが、よく、先生と戦わした議論などは、ちつとも書いてない。森田さんの、どっしりした、重々しい、そしてインプレシブな話振も少しも書いてない。私は、つい最近に、ボスウエルがジョンソンさえも、あんなに追い回して、彼の一言一動書き留めておいたのだから、木曜会ほどのものは綿密に書いておいて悪くないと、熱心に書こうと決心した。するとまもなく先生の御永眠と

なつてしまった。返す返すも残念でならない。それで、ほんの少しではあるが、それを緒に他のいろいろの話を思出すよすがにもなるかと思つて、ここに日記から抜書しておく。

大正三年十一月十九日。

先生の宅へ行くと、もう、小宮さんも森田さんも鈴木さんも、みんな晴々した顔して坐つていられた。その人々は気の利いた意気がつた形に照して、地味な、感じのいい津田さんは、日露戦争の際、旅順攻撃に従軍した当時

の日記を、どうかしたいと話をしていた。

森田さんが、『チャイルド・オブ・プレジユアー』の不審を先生に聞かれたのが緒になって、ダヌンツイオの話が出た。先生は、よほど以前に、この小説を読んで、その感想を本のみかえしのところに英文で書いておかれた。誰れかがそれを見て、こんなものが書いてあると、言ったら、先生は、どれ見せると、本を手にし、眼鏡をかけて、笑いながらこの古い記録を流暢な発音でお読みになった。もとよりそれはダヌンツイオを賛めていなかった。

私はこの日記をここに抜書するについて、先生の『チヤイルド・オブ・プレジユアー』から、みかえしのところに鉛筆で走り書きがしてあったものを写しておいた。それは、外国人のような手跡で、次のように書いてあった。

A series of love affairs and nothing but love affairs. Love begot of the heavy air, highly charged with the artificial perfume of decadent civilization. Love that flitters from this flower to that, seeking this and forsaking that, likes butterflies. But those gold variegated wings of his are not made by nature; they are

the gratuitous product of elaborate artifices, with the specious appearance of reality. Such is the skill of the juggler !

A love, all brilliant and hot, set in an intoxicating aromatic scene. Another love, equally sensous and glowing with colour, set in another earthy paradise. That scarcely over, a third one in the midst of roses, violets, brocade, and damask curtains. So on ad nauseam. There is no phrase in English so bit for the title of the book as "The child of pleasure." Only the child is not the child of

nature, and too spoiled to pursue pleasure with innocence. Nor is he even for a moment conscience stricken, being too refined and civilized for that. He is a doomed child, never realising the horror and misery of his doom.

An Italian it is that has written the book. Was he cansciou, when he wrote it, of the effect wrought upon him, by the climate, the art, the society, and the so-called civilization of his own country ?

それから先生は、ふと、こんなことを仰言った。

「シエクスピアーでも、近松でも、黙阿弥でも、その時代の気に入るように書いた。いわば、なんの目的もなく、ただただパンを得るために書いた。だから、その作にはなんとなく嫌味がない。そしてどこかに味がある。時代を超越して、わが作は今後何年立ったら再版されることを欲すと遺言して死んだ人も西洋にはあるそうだが、そういうものは、どこかに、嫌なところがあるね」

十一月二十六日。

今夜、また、この前の夜にあったような話題が出た。

先生はこう仰言った。

「意識がすべてではない。意識が滅亡しても、俺というものは存在する。俺の魂は永久の生命を持っているから。だから、死はただ意識の滅亡で、魂がいよいよ絶対境に入る日出度い状態である」

私は先生のこのお詞を思出しながら、「南無阿弥陀仏」と小さく書いたたくさん紙片に蔽われた、先生の御骸に最後のお別れをした。あの時の先生のお顔は、実に、気高かった。奥さんが「さあ、よく御覧なさい。いい顔

しているわね」と、御自身は涙で赤く脹れた顔をそむけながら、私等に先生のお顔を傾けてくださった、あの時ほど死ということが怖ろしく思えたことはなかった。平常の先生を思い、あのような美しい死顔を見るにつけ、私は死というものを懐しくも思った。こう言っては悪いかもしれぬが、先生は、私等が死に出会う時のために、いいお手本をお示しになったような気がした。そして、偉大なる、ずばぬけたる作品をたくさん残し、平和な靈魂の世界に対して、非常に強い信念を抱いて、瞑目せられた先生がお羨しくも感ぜられた。

それから、先生はこんなことも仰言つた。

「僕は文芸の批評のうえに、ある時代までは一つの煩悶があつた。自分がある外国の作品を読んで、これはいいものでないと思つても、あちらの人がいいものだと言う時に煩悶が生ずるのだ。が、今日においては、僕にはこうした煩悶も迷いもない。ある意味で、僕は、文芸上に安心立命を得ている」

大正四年三月四日。

先生のところで、今夜、雪舟の墨絵の巻物の写しを見た。確か、岩波さんが先生に進呈したもののように聞いた。線と濃淡の美だけでできている絵であった。先生や小宮さんは非常に感嘆の語を洩して見ていられた。

大正四年十二月日。^(ママ)

先生は、今夜、雪舟の絵について大いに論じられた。

「あれくらい調子の高い、あれくらい崇高な絵は、ちよつと、珍しいね。ああいう絵の気品というものは西洋に

はない。シャバンヌの絵がああいうものに近いと言えるが。なにしろ、西洋の絵は人情が主である。人間臭いものが多い。人間を離れた、人情をとり除いた、気高い芸術品を絵のほうに求めると、まあ、雪舟がそれだ。が、文学にはない。文学は人情からできているからだ」

森田さんや久米君たちが、それならどういふところが雪舟の絵は気高いのですと、詰問した。

「雪舟の絵にはムービングがないね。馬一匹描くにしても走っていたり、跳ねていたりしているところを描かない。北斎はそういうマンネリズムをやっているのだ。が

雪舟の馬は落付いて、ちゃんと坐っている馬でなければならぬ。雪舟はそういう馬を描いて、馬の本態をよく現わすのである。また馬のエッセンスはそういうポーズでなければ出ないのである。木でも、雪舟のは木のエッセンスが出ている。水でも、水の本態を描くのである。風が吹いて立つ浪のところは描けても、静かな水の本態のところを捉えて描いている人は、あまりない。要するに、雪舟の絵は気高い。デイバインである。探幽、宗達、光琳の一派の絵と、雪舟派のとを並べてみてよく味ってみると、すぐ分ることだが、前者には、いっこう、気高

いというところはないね。後者に比べてみると調子が低い。露骨に言うのと、前者のは後者から見ても下品である」先生は、最後に、次のような断案を下された。

「全体、動くということは下品なものだ。動くよりじつとしていくほうが品がよい。だから、文学や音楽は動かない絵より下品なものだ」

この短い先生の詞が、先生の生涯のすべてを説明し尽しているような気がする。

大正五年一月一日。

朝から曇りで、いまにも降りそうな寒い日。

元日の漱石山房に来てみたいというのが主たる理由で帰省せずに、東京で年を越したのだから、雨の降りそうなものにかかわらず、午後三時ごろに出掛けた。

行ってみると、漱石山房は例の顔触れでいっぱいであった。松根氏、滝田氏も、私の後に来合わされた。

席につくや、結構な膳のものが出た。奥さんからお屠蘇を戴いた。こちらで正月をすることの初めてな私には、この時戴いたお雑烹の中に、鳥、松茸、小松菜などが入

っていたのが非常に珍しかった。

まもなく夕飯になって、私等はいい鴨の鍋を突いた。

聞けば、元日の漱石山房の夕飯はいつもあい鴨であるそうなの。
うな。

面白い話が出た。

滝田氏が、全体人間エナジーは何を喰ったらいちばん多くできるかという話題を出して、氏みずから世の文
学者にこの質問を出して得たところの答を三つ四つ挙げた。その中で藤村氏の答が面白かった。藤村氏はあい鴨
だと答えたそうなの。その理由は、元来鴨はおらんだ三つ

葉という草を喰べるが、この草が人間の腎臓の薬だとい
うのだ。その証拠に、和蘭オランダの色街の入口に軒を並べてい
る小料理屋には、みんな、鴨料理の行燈が出してあると
いうのだ。こんな話に笑いながら、大勢の若い人々は甘
そうに鳥を喰っていた。その陽気な光景を、先生は、さ
も愉快げに、箸もとらずに、打眺めていられた。すると、
滝田氏が、ある文士は小宮さんたちを非常に羨しがって
いますよ。こうして、大勢の門下のかたが御馳走を喰べて
いるのを、嬉しそうに、じっと見ておられるような、い
い先生を持っているからと、いうのでしようと、言った。

私等は九時ごろにやっと引上げて帰った。

元日に先生のところへ誰が年始に行っても、必ず丁重な膳のものを振舞われるのである。先生は誰彼の区別なく、客となって先生の宅へよるものに対しては、みな一様に歓待された。先生ほど、ホスピタリチイという英語をよく理解していられた人も少なからう。木曜会にはいつも、いろいろなものを出して、私等に喰べさしたり飲ましたりされた。先生は常々。

「客となつて私を訪ねてきてくれたものに対して、私に

はホスピタリチイの義務がある」
と言っておられた。

一月六日

内田君といっしよに先生をお訪ねした。

野上さんがこんなことを話していた。

「胡桃ばかり喰って十二年も生きている人があるそうです」

先生が「仙人だろう」

「いや。ある汽船に乗込んでいる船医なんです、結果

がたいへんいいから、もう十二年も続けているそうです。そして、あまり結果がいいから、その船の運転手や船長までも、この人の真似をして、その船に乗込んでいる人は、俺はこれで六年目とか、もう三年になるとかいう人ばかりだそうです。しかもその船医は哲学が大いにできるそうです」

「じゃ、ペジテールイアンなんだね」

「ええ、たまに林檎とか他の果物を喰べるが、米とか肉とか魚は、ちつとも、喰べないんですと」

「うん、世間には、実に、いろいろの人があるものだが、

君、平井金三ね、あいつ妙なことを言うそうだね。いつか、あいつの前で大きな筆が逆さに立ったというのだ。そして、特筆大書という文字が空中に出たというのだ。すると、その夜、誰かが死んだそうだ。支那で筆が逆さに立つと、なにか兇い前兆だというのだがね。それから、ある時、あいつが道を歩いていると、空にインド人の姿が、おおぜい、映ったそうだ。なにかというと、家へ帰ってみると、あるインド人から手紙が来ていたってね。だからよそから、来る手紙なんか、もう、見なくとも分るといふんだ」

一月二十日

もう、森田さんたちがきておられた。

昨今先生は春場所を見続けていられるので、自然、話題は相撲に走った。先生はなかなか相撲が面白いようであつた。そして、相撲は芸術だよと、言われた。

そこへ赤木君が来て、なぜですか説明してくださいと、言った。先生はこう答えられた。

「だってあれは日ごろの練習に依って、筋肉のすべてを自由自在に思い切り働かせることを覚えておいて、数秒

のわずかな間に、相手の手に応じて、妙技を奪って勝負をつけるのだ。相手が、こうやったら、よし、こうしてやると、頭の中で考えてやる仕事ではない。瞬間に、まったく本能的に相手に応じて押掛けてゆくのである。相手が押掛けてきた手をぱっと外して、それに応ずる手をこちらから仕掛けて、瞬間に勝を取るか、負けるにしても、綺麗に、ぱっと負けるところはいいね。まったく一つの技巧だね。相撲を肯定してかかると、相撲には以上のような芸術的ところがあるね」

「すると、太刀山は面白くありませんね。太刀山はただ

力でばかり押し通すのだから。なんらかの技巧でもって、相手を負かすというのではなくて、ただむやみな力で相手を負かすのですから」と赤木君が突込んだ。

「そうだ。太刀なぞにはあまり、チャンスを争うというところはないからね」

「とにかく、相撲を面白く見ている人は、たいてい、満足な生活を果している人ばかりのような気がするね。僕は、金に少しも苦勞がない人たちばかりのような気がするが、どうです、先生」と森田さんが笑いながら先生に尋ねかけた。

「そうだろうよ。九州あたりからわざわざ、見にくる人もあるんだから。すると、また、馬関あたりの芸者が、その人の跡を追って、東京へやってきて、いつしよに相撲を見ているんだから。世の中にはいろんな酔興があるもんだね。僕は相撲を見ていて、時々、はたして人生はこれでいいものかと思うね。あはは……」

みんなもくすくす笑った。

九月七日

今夜列座の顔触は、先生の左から、久米君、松岡君、

芥川君、岡君、岡田君、そしてまもなく内田君が加った。

私が来た時には、時節柄、虎列刺^{コレラ}の話が出ていて、先生が賑やかにみんなを笑わしていた。

ふと、滝田氏のこと話題に上った。先生が、

「滝田が今日も来て、先生、その花をお描きになる気は
ありませんかと、訊くから、そりや、描いてみる気にな
ることもあるうさと、返事をしたが、とうとう、これや
あれや（先生の左手には桔梗その他二三種の秋草、右手
には朝顔の花が盛ってあった）いっしよに描かされてし
まった」

「そして持って帰ったんですか？」

「呟、持って行ってしまった。全体、ああいつもも来るたびに書かして、どうするつもりかね」

「もう、ずいぶん溜っているんですね。なんでも、屏風とか、軸とか大きなものが四つも五つもあって、短冊やこまこましたものが二十も三十も、先生のあるんですけど」

「そうどうするつもりでしょう？」

先生が「熱中するんだね。あの人が大学をよしたのは義太夫に熱中したんだからね」

再び先生が「そうだね、僕が死んで、もし値でも出た時には手離してもいいくらいに考えているかもしれないね」

ちようどこの前の木曜であつた。私は病氣して半年ぶりに先生をお訪ねしようとして、午後三時ごろ南町を訪れた。その時小宮さんも来ていたが、滝田氏が盛んに大きなものを先生に書かしていた。先生は大文字の書を、二三枚書き終えられたが、拙いと言つて、それだけは滝田氏の持つて帰るのを許されなかつた。滝田氏は、次に、菊や竹なぞを、半切に三枚ほど描いてもらわれた。そして最

後に、短冊を先生の前に出して、「吾輩は猫である」を二枚書いてもらわれた。

私は、今夜先生の滝田君に対する心持を、非常な興味をもって聞いていた。

しばらくして、話が巢鴨の至誠院に移った。これについて、いろいろの話が出た。久米君がこんなことを言った。

「ある時、あの女が世界古今の偉人を数えた時、釈迦をいちばん初めに置いて、クリストを四番目にしたそうです。クリストを四番目にした理由がこうなんです。あの

女に言わすると、クリストは万人を救うために十字架にかかったが、その自己犠牲でもって万人を救わんとしたところまでは非難がないが、自分の身を殺したことが悪いんだそうです。巢鴨のは、万人を救うと同時に、当然、自分の身も生かさねばならないという精神を持っている宗教なんだそうです」

また、こんなことを言った人があった。

「こんなこともすると言いますね。女の子が目隠ししていて、大勢の人の前に出るんです。そしてその中のある一人の前へ来て立止って、その人は誰々さんと言い当て

ると言うのです。すると、言い当てられた人はエクスタシーに入って躍り出す」

と、先生がこう仰言った。

「目隠くししてて言い当てるといふ宗教は、ウオonderフルには相違ないが、有難いとは思わないね」

(大正六年三月、「新思潮」)

日本文学電子図書館

木曜会の思い出

著 者 松浦嘉一

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 別巻」角川書店
昭和42年10月10日5版発行

日本文学電子図書館